

## 目加田誠先生と中国文学 2

### — 『聊齋志異』 2 —

前回から清代の怪異小説『聊齋志異』をご紹介します。目加田誠先生が高校三年生だった時のこと、柴田天馬氏訳の『聊齋志異』がとても気に入って、大学で中国文学（当時は支那文学と言っていた）を選ぶきっかけとなったとも言えると言われているのが取り上げる理由です。

第1回目は「西湖主」でしたが、第2回目は「八大王」です。柴田天馬氏訳の創元社版では第6巻に、岩波文庫版では下巻の第65話として採録されていますが「すっぽん大王」の副題が付いています。

#### 【八大王】

馮（ふう）は貴族の出でしたが、今は落ちぶれていました。スッポンを捕って生活している男に金を貸していましたが、その男は返せないで捕ったスッポンを持ってきました。ある日大きなスッポンを持ってきましたが、額に白い星が付いていたので、不思議に思って放してやりました。

その後、馮が川のほとりを歩いていると、お供をつれた酔っ払った男に会いました。その男は馮を見つけてからんできましたが、「わしは馮だ！」と言うと、男は急に地に膝をついて「私の命の恩人だ。」と言って許しを乞いました。その後、男は馮を自宅に連れて行き、「八大王です。」と名乗り、たいそうな接待をしました。馮が帰るとき、八大王は口の中から一寸ほどの小さい人を吐き出し馮の腕の中に入れました。それ以来馮は目が良く見えるようになり、宝物は地面の下のものでも見えました。このため、馮はたちまち豊かになりました。手に入れた宝物の中に1面の古鏡がありましたが、この鏡は不思議なことに美人を照らすと像が残り、拭いても消えませんでした。国王の姫君は絶世の美女のうわさが高く、馮は姫がたまたま遊びに出た時に鏡に写し取りました。馮の妻がそれを外にもらし、激怒した王は馮を捕らえました。しかし、姫君は鏡に写し取られて恥をかいたから、いっそ馮のお嫁になりたいと王に伝えました。でも馮は妻がいるからと断りま

した。王と姫君は馮の妻に会ってみると、りっぱなみやげを持参し、また穏やかで上品なので二人とも気に入りました。妻は千人を越える人々に結納の品々を持たせて王府に納めたので、王は大いに喜び、姫君は馮のお嫁になりました。

ある夜、馮の夢枕に八大王がたち、贈ったものを返してもらおうと言って、腕にかみつきました。目覚めた馮は普通の人にもどっていました。

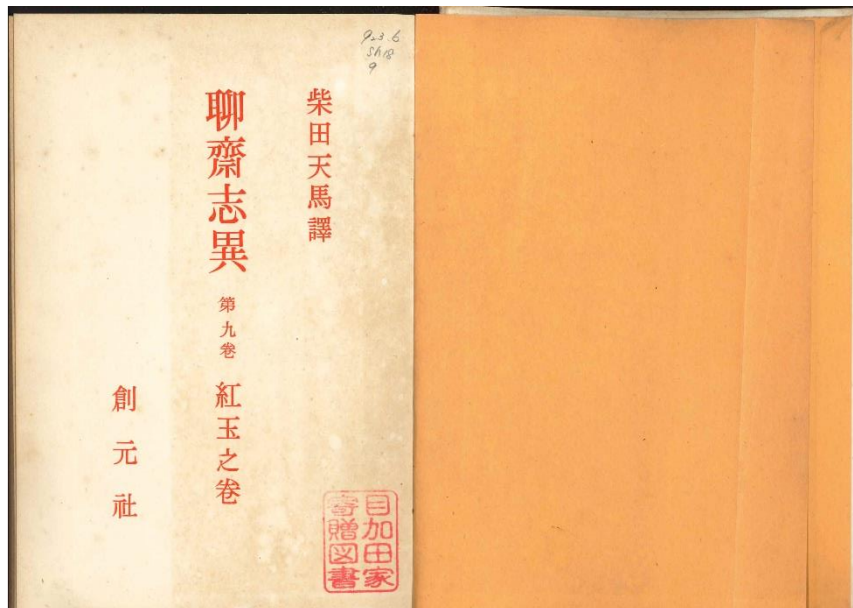
第3回目は「画壁」です。柴田天馬訳の創元社本では第9巻に、岩波文庫版では上巻の第5話として掲載されています。

### 【画壁】

江西省の孟竜潭（もうりゅうたん）が友人の朱（しゅ）と都にいる時のこと、散歩の途中にある寺に入りました。老僧がひとり寄宿していて、2人を案内してくれました。堂内には見事な壁画があって、人物などはまるで生きているようでした。東側の壁には天女が描かれていて、なかの一人は花を手にほほえむお下げの少女でした。口もとは今にもほころびようとして、誘うような目もとでした。朱は見つめているうちに心を奪われ雲に乗ったように浮き上がり壁の中に入ってしまった。中には御殿や楼閣があって、人間世界ではないことがわかりました。一人の老僧が説法をしていて、回りにたくさんの方が聞いていました。朱も聞いていると、おさげの少女が袖口を引いたので、後について行きました。小さな部屋に案内され2人で過ごしました。そうしているうちに、少女の仲間の天女たちに髪をお下げではなく、高く結い上げられました。ところが突然カツカツと靴音を響かせて役人たちが入ってきて、「全員そろっているか、下界の人間を隠していないか。」と問い詰めます。少女はそれを大変恐れて、朱に寝台の下に隠れるように言って、自分もあわてて逃げ出しました。朱は隠れていましたが、窮屈でがまんできないようなありさまでした。この時、お寺では孟竜潭が朱がいなくなったので、不審に思って老僧に尋ねました。老僧は笑って「説法を聞きに行ったのです。」と答えるので、「どこへ。」と聞き返すと「すぐそこですよ。」と答え、壁を叩いて「朱さんいつまで遊んでいるのですか。」と言います。すると、朱がふらふらで壁から出てきました。壁の絵のお下げの少女はまげを高々に結い上げていました。

「八大王」はすっぼんの恩返しですね。馮の奥さんは度胸のある人なのでしょう。でも、お姫様は馮のお嫁さんになってしまいましたが、いいのでしょうか。

「画壁」は壁の絵に入ってしまった男のふしぎなお話です。出てきたら、壁の絵の女性の髪形がお下げから結い上げる形に変わってしまいました。



柴田天馬訳  
『聊齋志異』  
第九卷とびら  
創元社  
昭和27  
年